

肺腺がんとはん間質との相互作用によるがん悪性化メカニズムに資する研究

1. 研究の対象

国立がん研究センター中央病院で 2011 年から 2020 年に肺がんの診断で摘出術が行われた患者さんを対象としています。

2. 研究目的・方法

【本研究の意義】

肺がんは死亡率が非常に高く、死亡者数も部位別がんの中で最も高い難治性のがんであり、肺がんの克服のためには、それらの発生・進展の分子機構や転移能等の特性を分子レベルで明らかにし、その情報に基づいて新たな予防、診断、治療法を開発する必要があります。肺がんは、外科的に腫瘍が切除されますが、切除できない患者さんや再発した患者さんには化学療法等の抗腫瘍薬による治療が行われています。しかしながら、これらの治療に反応しなくなった場合には病状が進行してしまうことから、更なる治療法の開発が望まれています。

がんとがん間質との相互作用は近年、がんの浸潤性や転移性、そして治療抵抗性といったがんの悪性化に関わり、がん幹細胞様形質の獲得にも非常に重要な役割を担っていることが言われています。しかしながら、実際の臨床がん組織検体におけるがんとがん間質との相互作用によって生じるシグナル伝達の異常に関して、十分には分かっていないのが現状です。そこで、細胞工学的・分子生物学的解析を行うことによって肺がんの悪性化に関わる分子メカニズムや特性の全ぼうを明らかにし、新たな治療法の開発に役立てることを目的に本研究を実施します。

【本研究の目的】

ヒト肺がんおよびそのがん周辺間質との相互作用によって生じる遺伝子発現変動とシグナル伝達経路の異常等を解析し、それらを患者さんの臨床情報と対比検討することで肺腺がんの悪性化の分子機構及び特性を分子レベルで明らかにすることを目的としています。

【本研究の方法】

本研究は 2011 年から 2020 年までに国立がん研究センター中央病院で手術が行われ肺がんと診断された患者さんの手術時に得られた試料から作製した細胞株や組織ブロックを用い、肺がんの悪性化に関係するタンパク質の探索やそれらタンパク質の発現を免疫組織化学染色という病理学的手法を用いて調査します。

研究実施期間：5 年間

3. 研究に用いる試料・情報の種類

情報：年齢、性、家族歴、既往歴、併存症、アレルギーの有無、治療内容（放射線療法・化学療法の有無）、切除標本の病理診断（大きさ、組織型、分化度、腫瘍の拡がり、浸潤・転移の程度等）、予後、喫煙歴等

試料：手術で摘出した組織等

4. 外部への試料・情報の提供・公表

研究に関する資料は個人情報が含まれない形で保管し、主たる研究成果を学術論文として発表した後、当該研究分野のホームページ等を利用し閲覧可能とします。研究資料の保存期間は原則的に5年です。

研究成果を学術論文として発表する際、その著者には、その論文に対する貢献度によって研究代表者が決定します。また、共同著者の承諾を得てから、論文の発表・出版を行います。

5. 研究組織

国立がん研究センター 宮崎 允

第一三共株式会社癌研究所 廣田 泰秀

6. 問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。
ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。

また、試料・情報が当該研究に用いられることについて、患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としないので、下記の連絡先までお申出ください。

この場合も患者さんに不利益が生じることはありません。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

国立がん研究センター 研究所 難治進行がん研究分野 宮崎允(研究責任者)

〒104-0045 東京都中央区築地 5-1-1

TEL:03-3542-2511(代表)

FAX:03-3542-2530

研究代表者

国立がん研究センター 研究所 難治進行がん研究分野 宮崎允(研究責任者)